

編集後記

私は耳鼻咽喉科の臨床医で、主として病気に関して嗅覚研究に関わっておりますが、本学会の特徴は非常に学際的なその性質にあると思います。学会誌も味と匂に関わる多彩な分野の論文が掲載されており、自分の研究とまったく違う分野の研究者の方々の論文を読んで、興味を持つだけでなく自分の研究に示唆を与えてくれるような情報が得られることが多いです。このような本学会誌の役割に少しでも貢献できるよう、努力したいと思います。嗅覚障害の領域では新型コロナウイルス感染症の拡大以降に多くの他分野の研究者が参入して研究の量も質も大きく上がりました。現時点では嗅覚障害に対する介入は非常に限られたものしかありませんが、今後国際的に研究が発展して新しい治療法が開発されることを期待しています。

本号のコンテンツですが、まず日本味と匂学会功労賞を受賞された林由佳子先生から「GENDER と SEX」という題で巻頭言を頂きました。ジェンダーバランスは多くの日本の組織における課題です。本学会も引き続きの取り組みが必要と感じます。特集総説は4報、総説は2報、それぞれご寄稿を頂きました。さらに第58回大会研究奨励賞受賞記念総説が3報、同じく優秀発表賞寄稿3報、海外だより1報、技術ノート1報、書評1報とバラエティーに富んだ中身の濃い内容となっております。ご多忙の中ご執筆頂きました各先生方には改めてお礼申し上げます。

(近藤健二)

2024年1月より、日本味と匂学会誌の編集員になりました、味の素株式会社 食品研究所の伊地知千織と申します。編集委員長である重村先生を盛り立てつつ、諸先生方とより良い学会誌を会員の皆様にお届けできるよう、精一杯努めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2025年11月に発刊予定の32巻2号では企業研究特集を予定しております。企業で行われる味と匂に関わる研究がどのように産業実装へつながっていくのか、その一端をお伝えできればと思い、編集いたします。寄稿をお願いした企業研究員の皆様にはご負担かと存じますが、何卒よろしくお願いいたします。

さて、本号の海外だよりはドイツへ留学中の大谷氏からのレポートです。留学を考えている若手研究員の皆さん、是非読んでみてください。春のドイツと言えばシュパーゲル（白いアスパラガス）！ 大変人気だそうで、市場で籠いっぱい売られている写真をみたことがあります。彼も既に食べたそうで、羨ましい限りです。日本でも最近では白いアスパラガスがスーパーに並びますが、ヨーロッパのそれとは香りが異なるような気がします。日本ではやっぱりタケノコが春の香りを届けてくれるのでしょうか？ 水煮を買うことが多いですが、匂の時期に一度は生から煮ると、キッチンいっぱいに香りが広がって幸せな気持ちになります。

(伊地知千織)